

あつたのではないか。そして、本書のねらいに合わせるならば、例えば、鈴木サツという

書評

内ヶ崎有里子著

江戸期昔話絵本の研究と資料

聞きたかつた。

本書を読んでみて 第一部から第二部へと研究が進んだことが確認できる。それは、韓国から遠野へ、「構造」から「語り手」へという動きだった。だが、「構造」と「語り手」の関係は端緒をつかんだという段階ではないか。韓国と比較しながら述べられた「構造分析」と、遠野における「語り手」とに連関はまだ見いだされていない。だが、私自身の希望を述べるならば、その関係を論じることを視野に入れつつも、まずはそれぞれのテーマに対する徹底的な追究を望みたい。著者の研究がそうしたかたちで進んだら、日本の昔話研究はもう一段高い所に押し上げられるにちがいない。

(大阪大学出版会、本体六八〇〇円)
(いしい・まさみ／東京学芸大学)

ル、△という言葉を使われたのである。

ヘンダフル／という形容詞は英語学習の最初に教えられる言葉であって、さして陰翳あるものとは思われないが、しかし英語の基

フワーハーの名がふさわしいが、不惑の歳に満たぬ最初の出版でこのような書物を世に出すとは、本当にワンドフルな人生だと祝福せ

今からだととづいたぶん昔のことだけれども、逸見久美さんの『評伝と謝野鉄幹・晶子』(一九七五年・八木書店)が上梓されその記念の会が催されたとき、卒寿を越え日本近代文学

本語のうちの最もなるひとつであり、それを用いての本間氏の賞讃には力があつた。わたしはその会の司会者であつたのだが、しばし立場を忘れるほど心搏たれたのであつた――

上
笙
一
卽

ずにいられない。

前置きがいささか長くなつたけれども、『江戸期昔話絵本の研究と資料』は、書名どおり、江戸期に刊行された庶民・子ども宛ての諸種の絵本のうち、△昔話△に依拠して成つている△絵本△を専心的に研究したものである。未読の人ためその大概を紹介すれば、全体は「序章」「本編I」「本編II」「終章」というふうに構成され、巻末に「資料編」が配置されており、まずはいわゆるアカデイミックなスタイルだ。

「序章」はこの研究書のマニフェストといふべく、第一節「江戸期昔話絵本研究の現状及び本研究の目的と方法」では、まず、「江戸期に出版された昔話系の絵本」をとらえることは近世文学の一側面をあきらかにするとともに民俗学の一分野としての昔話研究に立ち、さらに児童文学・児童文化の研究に寄与するところが大きいと主張している。つづく第二節「先行研究」では、冷徹な学習の眼ではなく市井の趣味人の眼をもつて江戸期子供絵本を見た水谷不倒にはじまつた研究の歴史を通観、二次大戦後の一九八〇年代に到つて一定の研究進展のあったことを確認し、そ

しているのである。そして研究の方法として、取上げた昔話絵本の「本文と絵柄の特徴」に特に留意するとしていることは、絵本研究としては当然ながら万全の用意であり、その研究方法の相当程度につらぬかれていることが、この一冊の価値を高めているという次第でもあるのだが。

「本編I」は本論中の核心部であつて、江戸期昔話絵本への正面からのアプローチであるが、しかし著者は、数ある昔話の話材のうちから「桃太郎」「舌切雀」「花咲翁」「かちかち山」「猿蟹合戦」を選び、調査・研究をこの五つに集中させている。一般に△五大昔話△と言われるこの五つの話材に研究を集中させたことは、賢明な手立てであったと言うべきだらう。——何故かなら、これら五つの昔話は、江戸時代にあっては絵本としても多くの刊行されたもの、近代においては初等義務教育の国語教材として取上げられ、日本の庶民と子どものいわば基礎的文化となつており、したがつて昔話絵本研究のメルクマールと見るにふさわしいからである。

かくて選ばれた△五大昔話△に関する、およそ江戸時代に上梓されたあらゆる種類・様式の絵本、すなわちいわゆる赤本から黒本

までなのだが、しかし、江戸期の子供絵本は消耗が激しくて残っているものが極度に少なく、その諸本の提示にどれほどのエネルギーが割かれたかと思うと、おのずからに頭が下がる。そしてこの手続きの上に立つて、諸本の紹介はもちろんのこと、赤本・黒本段階から黄表紙段階・合巻段階を経て最末期の豆本段階に至るまでの内容的な変化・発展を追い、代表的・典型的と思われる絵本については、相互に比較的な考察を加えてもらっているのである。そればかりではない。赤本・黒本から豆本に至る各段階の昔話絵本における影響関係を、〔桃太郎〕絵本の裡のみならず異主題の昔話絵本のあいだにも探り、さらに、当時の市民風俗に深くかかわっていた歌舞伎芝居にまでもおよんで探査しているのだ。

こうした「本編I」につづく「本編II」では、江戸昔話絵本のいわば外延的な主題・問題があげつらわれていると言つてさしつかえない。その第二章「江戸期昔話絵本に見る赤本と黄表紙のかかわり」では、従来へ子どもも用△とされていた赤本系の昔話絵本と△大人

のなぐさみ本▽と見られていた黄表紙の昔話
系絵本との関係が、あらためて問い合わせられ
る。さらに、江戸産の昔話絵本と上方出来の
昔話絵本との性格の相違が、江戸の絵本『大
鳥毛庭雀』と上方の絵本『今昔雀実記』の比
較というかたちであきらかにされているのは、
珍しいと言つてよいのではないだろうか。

しかし、ユニークなのは、第四章「江戸期
昔話絵本の序文や奥付・広告などが語るも
の」と第五章「関連領域研究」のふたつであ
る。序文・奥付・広告などはその書物の文化
的内容とはほとんど関係ないことが多いのだ
が、江戸期絵本の出版・販売事情や読者状況
を知るには有力なデータであつて、そこに着
目した第四章は、絵本という文化の外延的研
究として小さからぬ意味を持つてゐる。そし
て第五章「関連領域研究」では、子供絵本と
は何のつながりもないはずの二冊の書籍、神
道的な心学の書である賀茂規清の『離迺宇計
木』(一八五〇年頃成稿)と熊阪台州の漢文戯
作『含鶴紀事』(一七九一年刊)を取り上げ、
これらが△五大昔話▽中のいくつかを利用し
たりカリカチュアライズしたりしているとこ
ろから昔話絵本との関連を追究しており、は
なはだ含蓄ある章となつてゐるのである。

さて、終章は「江戸期昔話絵本に
おける最大の問題、伝承的文学としての△昔
話▽の題材・内容が、文章と絵画とを統一的
に結びつけた△絵本▽という文化形式におい
て、如何なる顕現を示しているか——」とい
う問題への肉迫だと要約したらよいだろうか。
著者は、実見した昔話絵本のすべてを精査し
て、いずれの「桃太郎」絵本にも「花咲翁」
絵本にも共通して描かれている場面があるこ
とを捕捉、主題とからませつつ、昔話のどの
ようなシチュエーションが△絵▽として取上
げられるのかをあきらかにしている。画龍、
みごとに点睛されたおもむきだと言つてさし
つかえあるまい——

内容紹介に筆をついやし過ぎたけれども、
以上のような一冊、児童文学研究と近世文学
研究ならびに伝承文学研究のこれまでの歩み
の裡に置いてみれば、どれほどワンドラフルで
あるかが瞭然とするであろうと思う。

わたしは△児童文学▽の側の研究者なので
ひとり。戦後になつても、中村幸彦・鈴木重
三そのほかが絵本・子供浮世絵に余技的な発
言をしたのみだったが、やがて、小池藤五郎
の子息「小池正胤を囲む東京学芸大学の近世
文学研究グループ△叢の会▽が江戸期子供絵
本の専門的研究誌『叢』(一九七九年)を創刊。
そしてこの研究誌『叢』の穫入れとして小池
正胤編『江戸の絵本』(全四巻)(一九八七〇八
年・国書刊行会)がまとめられ、やや先立つ
て中野三敏他編『近世子どもの絵本集』上方
んど一瞥も與れて来なかつた。日本児童文学 編・江戸篇(一九八五年・岩波書店)が刊

の歴史的研究は一九二〇年代△太正末期にス
タートしたが、それより二〇〇〇年の今日ま
で、江戸期子供絵本に心を寄せた者は、藤沢
衛彦と瀬田貞一およびわたし△上笙一郎、そ
して外国人のアン△ヘリングの四人しかいな
かつたのである。

行されていて、研究の基礎が築かれるに至つてゐるのだが。

主要を成す昔話絵本に限つての研究ではあるが、第一に、その資料的な発掘・確認に関し
うか。 第

第

そしていまひとつ、伝承文学研究の領野について見れば、日本の昔話研究は柳田国男による民俗学研究にはじまって幾多の研究者による業績が積み上げられているわけだが、その研究は△伝承採集▽を事としており、江戸期に固定されたものとしての△昔話絵本▽類は一切眼中に入れて來なかつたのである。そのようになつたのは、日本民俗学の指導者としての柳田の中に農民はあつても町人はなかつたこと、そこに發して町人階層の作った絵本類への拒否的とまでは言えぬにせよ幾分か敬遠の姿勢があつたからではなかつたか。

第三に、研究方法として昔話の主題を基軸に文と絵の関連・特徴の析出に重きを置き、さらに上方絵本と江戸絵本の性格までも実証的に指摘して、大きな力を持つてゐると言つてよいのだ。そして結論として記すなら、この大冊・児童文学研究・近世文学研究・伝承文學研究の三領域をとおして從来の最高度の達成としなくてはならず、これを越える研究はおそらく数十年後でなくては現れまいと思われるのだが――

江戸期子供絵本のうちの昔話系絵本の実証的な研究にあり、成果は十分に挙がっているのだから無いものねだりだと言わてしまふかも知れないが、実証以外の思索と方法も採り入れてもらいたかったと思うのだ。たとえば、民族＝民俗信仰論的な立場からのまなざしがあれば、「桃太郎」絵本論は日本民族のへ小さき信仰今まで到り着き、研究は一層深みを増したであろう。また、文学的・哲学的な考究・洞察が備わつていれば、一見では類型的文学に過ぎぬ昔話に秘められている鋭くて且つ重い人間追究がとらえられ、研究をさらにも豊かなものとしたにちがいない。かつて松

しては、児童文学・近世文学・伝承文学のいづれの分野をとおしても、その研究は、資料発掘・資料確認的な報告についてのものが多く、一本をへ文化的な作品として文学的・児童文学的・美術的に考究したもののはほとんど無かつた。その中に置いてみると、この『江戸期昔話絵本の研究と資料』の達成度が歴然として来るのである。

内ヶ崎有里子著『江戸期昔話絵本の研究と資料』のワンドフルな理由は以上に述べたところだが、しかし、児童文化研究の専門家であり近世文学にも少なからぬ関心をいだくわたしとして、不満をおぼえるところがない訳ではない。その不満は大きく数えてふたつあつて、第一はこの本の内容に関してであり、第二は、この書を大きなメルクマールとする現在の江戸期子供絵本研究全体の思想ならびに姿勢についてである――ということになろ

谷みよ子は、「舌切雀」のお婆さんは何故に雀の舌を切つたのかという自問にたいし、おそらくは夫が若い愛人の許に走つたことによるみずから離婚体験をメントとして、それは、お爺さんの可愛がつた雀がへ雌メス／＼でありますへ女性レディ／＼であったからである——という自答をしたことがある。意外にしてしかも重たいこの洞察が、「舌切雀」という一篇の昔話の文学的・哲学的な価値を、どれほど高めたことであるか。

すなれちこの一冊は江戸期における子供向き絵本の全般にわたつてではなくその裡の

現在の江戸期子供絵本研究全体の思想ならびに姿勢についてである——ということになろ

の文学的・哲学的な価値を、どれほど高めたことであるか。

つづいて第二の点に触れようなら、この本は徹頭徹尾へ近世文学▽研究の立場に腰を据えて書かれているわけだが、そのことが、研究のひとつ目のマイナスとなってしまっている——というふうに言わざるを得ない。そして

それは、著者¹¹内ヶ崎さんひとりの責任ではなくて、日本の近世文学研究界と児童文学研究界のそれぞれ総体的な責任であると見なくてはならないのだが。

嘗みくだいて言うとすれば、この大著には取上げた五大昔話の近代絵本における展開の追究は全くなく、読者の多くは、へ江戸期昔話絵本の研究▽という主題の外の問題なので敢えて言及しなかつたのである——というふうに納得するのだろう。けれども、内ヶ崎さんについ五大昔話の近代絵本における展開を近代児童文学の価値観をもつて把握せよと迫ったとしても、彼女にそれを爲果すことはむずかしいにちがいない。何故かなら、彼女のへ研究の眼▽はへ近世文学界▽によつて養われており、彼女がへ近世文学▽とそれより派生したへ児童文学▽の思想・価値観を十分に攝取・内在化しあおせているとは、残念ながら思えないからである。

内ヶ崎さんのほかにも、木村八重子・小池

正胤・加藤康子・船戸美智子といったふうに正胤・加藤康子・船戸美智子といったふうに江戸期子供絵本に取組んでいる研究者はいるのだが、そのなかに、近代・現代の児童文学の児童的文学にはほとんど関心を寄せていない

にも通曉し、論評・研究の筆を探つていると、いう人は残念ながら絶無である。すなわち、内ヶ崎さんのこの大著をはじめとする江戸期

このよつた状況は、何とも困るとしなくてはならない。江戸期子供絵本は後期封建社会の児童文学にはほとんど関心を寄せていない

にも通曉し、論評・研究の筆を探つていると、いう人は残念ながら絶無である。すなわち、内ヶ崎さんのこの大著をはじめとする江戸期

子供絵本の研究は、近代児童文学の思想・価値観と交叉することなく、近代児童文学の批評・研究といささかの接点もなく、孤立的に進められ成就してしまつたとせざるを得ない。そしてこの状況を裏返せば、それは、そのまま、現在の日本の児童文学研究の不幸な状況を示しているとしなくてはならないのだが

このよつた状況は、何とも困るとしなくてはならない。江戸期子供絵本は後期封建社会の児童文学にはほとんど関心を寄せていない

日本における児童文学研究者の組織として日本児童文学学会があり、会員は四百数十人、日本児童文学学会があり、会員は四百数十人、その過半が日本の創作児童文学アプローチする人であるわけだが、そのなかに、近代以前の児童的文学に眼配りしている人はほとん

どいない。内ヶ崎さんの本の巻末に「参考文献」として江戸期子供絵本をめぐる研究的論文のリストが載せられてあるが、およそ全部が近世文学研究者の手に成るもの、児童文学はもちろん、現代児童文学にもわたる享

研究者の業績として記録されているのは、わずかに、瀬田貞一・滑川道夫およびわたし。そしてふたつに、児童文学の研究者が、へ児

童文学は近代のものとの誤見を捨てて、近代以前の児童的文化としての江戸期子供絵本への偏頗なき関心を育てることであるだろう。

このふたつの課題が果された時、内ヶ崎有里子さんのこのワンダフルな書物、『江戸期子供絵本昔話絵本の研究と資料』を越える研究書が現

れるにちがいない。それが今より幾年かの後でないことは確かであって、そのことは内ヶ崎さんのこの大著の素晴らしさを証拠立てる

ものとして慶賀するけれど、幾十年もの後になるとすれば、内ヶ崎さんに關してはよろこばしく、しかし日本の近世文学・児童文学研究の総体的見地からすれば、いささかなならずのだが――

(三弥井書店、一九九九年、八九〇〇円)
(かみ・しょういちろう／児童文学学者)

書評

内田順子著

『宮古島狩俣の神歌　その継承と創成』

真下厚

狩俣の神歌研究、そして広く祭儀のなかの神歌伝承についての研究を飛躍的に前進させたものが世に出た。

この地の神歌研究は稻村賢敷氏によって始まつたが、外間守善氏・新里幸昭氏によって秘伝であった膨大な数の詞章が記述され、報告されることとなり、大きく進められることになった。その後、本永清氏によつてほぼ同じ種類の神歌についての別の報告もなされてゐる。こうした神歌は、村外者にはもちろん、識を持たない者にとって、こうした共通語訳で神役以外の村人たちにも、秘して口承されてきたものであつて、これらの調査報告がその

詞章を記述し、明らかにしたことは大きな意義の存するものとして高く評価できよう。こうした研究がなければ、我々は狩俣の神歌の全体像を知ることができず、複雑な祭儀と神歌とに分け入ることはとてもできなかつたであろう。しかし、その成果として報告されたものは、書物の性格上、それらの神歌が立ち

現れる場との関わりについて十分に記述されたものではなかつた。また、これらの資料はその詞章のことばについて共通語訳を付したものが、神歌を伝承する神役たち自身のものであったが、神歌を伝承する神役たち自身の理解とどのように関わるのか定かではなかつた。もつとも、外間・新里報告資料の場合、言語学的な見地から付された共通語訳では神歌の内容をいくらか知る手引きともなるものでのあったことも認めていいだらうが。

本書はこうした先学の立場や方法を批判して、祭儀のなかにおいて神歌を捉え、それをよむ神役の女性たちの心に徹底して寄りそうことによつて、神歌に迫ろうとしたものである。神歌を外側からではなく、いわば内側から捉えることを目指したものである。そして、そのことによつて「神歌のかたち」を見出し、